

笑いのマジック・ナンバー

久保 正敏 (くほ まさとし)

文化資源研究センター

マ

マジック点灯云々の季節は終わったが、世界にはほかにさまざまなマジック・ナンバーがある。越年前後に注目される「千十二支」も、基本的な数を組み合わせて古代中国で生まれた。十干は「陰陽五行説」、すなわち二と五の組み合わせからきており、十二支は一年の月を数える十二進法が起源で、メソポタミア発祥の黄道十二宮に似ている。

陰陽など二元論の「二」は、生物の形にも関係ありそうだ。生物進化を振り返ると、海中を浮遊していた単細胞生物は球対称だが、海底に固着した植物は上下の区別ができて円錐対称となり、動くので前後の区別ができた動物には左右対称性のみが残つたらしい。いずれにしろ、上下・前後・左右・雌雄など、二元論の起源のひとつは生物にちがいない。同様に「五」は、指の

数に起源をもつ、数の数え方と同根か。

哲学や宗教世界で、むかしから語られてきたのが「四」や「五」だ。世界を構成する基本要素に因り、古代ギリシアでは、土・水・火・空気の「四元説」、次いで、天体を構成する完全元素アイトール(後世のエーテルを加えた「五元説」が唱えられた。古代インドでも、万物は地・水・火・風から成るとする「四大説」が唱えられ、仏教では「これに「空」を加えた「五大」、さらに「識」を加えた「六大」へと展開する。密教における五輪塔は五大の具象形だが、こうした要素論は今でもロジをきき立てるのか、リユックベッソン監督は四大に「愛」を加えるべしと「フィフスエレメント」を発表した。「四」といえば、キトラ古墳で見つかった四神獣(青龍・朱雀・白虎・玄武)の四神思想は風水思想につながるほか、相撲場四隅の房の色(青・赤・白・黒)にあらわされるなど、方角や形にかかわるものも多く、また五行にも結びつく。かように、四(四大文明、四天王、四季など)や五(五穀、五感、五臓など)は、人間の感性に合うのか身近なのに対し、「三」は三位一体、三権分立、御三家など、相互に関係する要素の組をあらわす際によく登場する。

と

いうところまでがじつは長い枕で、お正月らしく、笑いのマジック・ナンバーを語りたのが本題である。故桂枝雀フンの筆者が気づくのは、ほぼ同じ会話の繰り返しで笑いを取るパターン。たとえば上方落語「口入れ屋」冒頭、番頭が奉公志願の娘たちに向かつて小言を三度繰り返す場面。

「あんた最前から豆食べんのはかまへんで。けど、皮を散らかさかようにな……(別の娘に)猫のヒゲを抜いたらあかんがな。ネズミを捕らんようになるよつてに……(もう一人に)あんたなあ、着物の前を揃えて座んなはれ。なんや白いもんがチラチラしたら気が散って帳面つけがでけんがな」
このほかにも、「高津の富」で気楽な男がくじ引き前に賞金の使途をのろけまじりで述べたてる場面、「宿屋仇」で騒がしい連中の隣部屋に案内された侍が番頭に文句を言う場面、「住吉駕籠」で酔漢が駕籠屋をからかう場面など、会話を変化させながら三度繰り返すパターンが多い。繰り返しの二度目では「おや、さうごと同じ！」と聴衆は訝るが、三度目にはドツと笑いがくる。四度になるとくど過ぎて逆効果。そういえば「我が輩は猫である」の最終章、寒月がウエイオリンを買って顔末のうち干し柿を食う段を三度語るのも、落語好きの漱石ゆえか。
そんなわけで、石の上にも三年、三度目の正直、仏の顔も三度まで、三日坊主、など、反復や持続の終結にかかわる三に引きつけて、「くどき」一步手前の三が、繰り返すによる笑いのマジック・ナンバーだ」という新論を唱えたい。正月お笑い番組でこ確認のうえ、読者諸賢の賛同をいただければ幸いだ。